龜谷行著

和漢俗身訓

三

俗

俗
第 五 號
共 拾冊
年 月 日 備付

3

共拾

K11C.1
190.
3

和漢脩身訓卷三

龜谷行著

第一章

○三綱とは何ぞや。君臣父子夫婦を謂ふなり。君は臣の綱なり。父は子の綱なり。夫は妻の綱なり。白虎通

○人の禽獸に異なるゆゑ人の者

國民精神文化研究所
24224
和漢

ハ。倫理のこ。何をゝ倫と謂ふ。父子君臣夫婦長幼朋友。五者の倫序是あり。明丘瓊山戒子書

○人の實學ハ。五倫上より做し起ることを要に。傳家寶

○父子親あり。君臣義あり。夫婦別あり。長幼序あり。朋友信あり。孟子

○孝ハ百行の本あり。故ふ人と志て孝あらざ者。其本先づ絶も他の善行良才ありと雖も。觀るよ足らぬ。貝原益軒語

○父母よ對してハ。色を和げ。氣を下し。温和を主として事ふ。貝原家道訓

○病て牀よ臥し。之を庸醫ゑ委ぬるハ。不慈不孝よ比ス。親よ事ふ者ハ。亦醫を知らざるべからず。程伊川語

第二章

○嘉肴ありと雖も。食ハざきバ。其旨を知らず。至道ありと雖も學ハざきバ。其善を知らず。禮記

○道近しと雖も。行ハざきバ至らず。事小ふりと雖も。為ざきバ成らず。韓詩外傳

○事ハ勉強よ在り。勉強して學問ス。聞見博くして。智益明あり。勉強して道を行ハバ。德日ふ起り

て大よ功あり。漢董仲舒語

○學問の道。敢て自ら是ありとせぜ。其心を虛くし。人よ受きバ。自ら得ることあり。朱子語

○學を為もよ。須らく今ハ是よして。昨ハ非なるを覺ゆべし。日々改め月に化して。便是長進も。同上

○書も誦を成さゞるべからず。或ハ馬上ふあり。或ハ中夜寐らきざる時ふ在り。其文を詠じ。其義を思へバ。得る所多し。司馬温公語

○學を為もよハ。先づ志を立つ。志既よ立てバ。學問次第よ力を着く。志を立ることと定まらざ

社ハ。終ヨ事を濟さず。朱子語

○讀書を首として。志を立つるを要に。志を立つるハ。堅を貴ぶ。堅くして恒あるべハ。其學必成る。讀書心法

○有志の士を。利刃の如し。百邪辟易に。無志の人を。鈍刀に如し。童蒙侮翫に。佐藤一齋語

○人事百般。を。捨て遜讓を要に。但志ハ師ヨ讓らざるべく。又古人ヨ讓らざるべし。同上

○盛年を重て來らず。一日を再び晨あり難し。時ヨ及びて。當ヨ勉勵をべし。歳月ハ人を待さず。晉陶淵明詩

○朝ヨ夕て食をさきべ。晝ヨして

饑ゑ少くして學べざるべ壯ふ〜て惑ふ饑る者猶忍ふべし惑ふ者を奈何ともせ難からば。佐藤一齋語

第三章

○凡諸の卑幼事大小とおく專らよ行ふことを得る母き必ず家長よ咨稟せよ。司馬温公語

○凡兒童ハ。須らく是衣冠整齊言動端莊ゐるべし。廉耻の二字を識り得るべ自然よ正大光明の氣象あり。言行彙纂

陶淵明先生

○凡宴會賓客雜坐ハ。質疑問難の時ヨ非ず。詩文を講說ス。自ら博雅を誇る。ゑうらぶ。恐らくハ知らざる者。之を恨ミん。金言

○人の書籍を翻〳〵。人の書案を塗り。人の花木を折り損ふ。みな人ヨ厭むるの事あり。竊カ人の

篋中の字跡を窺ふ。尤不可あり。同上

○人の私語を見て。耳を傾け竊ヨ聽く勿き。人ハ私室ヲ入り。目をそむゞて。旁觀せる勿き。頌體集

第四章

○言語を慎ミ。以て其德を養ひ。飲

食を節よし。以て其體を養ふ。事の至近ふして。繫る所至大ふるハ。言語飲食ふ過ぐるハ莫し。程子語

○食を節よもれバ疾ふし。言を擇べむ禍ふし。禍の生ぜる。天より降るふあらぢ。皆其口より出。西疇常言

○人乃惡を稱もる者を惡ミ。下流よ居て。上を訕る者を惡む。孔子語

○是の邑よ居て。其大夫を非らぜ。子貢語

○人を傷るの言ハ。矛戟より甚し。況や紙筆よ形もをや。荀子

○一坐の中。好て言を以て人を彈射もる者あらバ。吾宜く端坐沉默

し。以て之を銷せ爲し。此を不言の教と謂ふ。願體集

○人の聞ことおきを欲せむ。言ふ勿れ。人の知ることおきを欲せバ。為す勿き。同上

○喜ぶ時ハ言も。多く信を失ひ。怒る時の言ハ。多く體を失ふ。傳家寶

○人と約せバ。信を失ふこと勿き。當ニ思ふ爲し。一たび信を失ふ。人さることを得ぢと。大和俗訓

○もし其事。義ニ協ハず。或ハ力及ばぢんバ。始より約を結ぶ爲こうらぢ。同上

○常ふ虛誕を說く者ハ。時ありて。

信誠のことを言ふとも。人之を信ぜじ。紳瑜

第五章

○善を為せる者は。天之が報るゝ福を以てし。不善を為せる者は。天之が報るゝ禍を以てせ。孔子語

○善が善報あり。惡ゝ惡報あり。善惡報ずきは。時節未だ至らじ。事林廣記

○善は小なりとして。益なしと謂ふ。而うらじ。不善は小なりとして。傷きなしと謂ふ。而うらじ。賈誼新書

○其心厚き者は。其福厚し。其量弘き者は。其德弘し。日計足らじ。月計餘りあり。明吳懷野語

○薄福の者ハ。必ず刻薄ふり。刻薄ふれバ。福更ふ薄し。厚德の者ハ。必ず寛厚ふり。寛厚ふれバ。德更ふ厚し。紳瑜

○小人專ら人ゝ恩を望む。恩過ぐまバ感ぜず。君子輕く人の恩を受けば。受くまバ忘まゝ難し。同上

○我人ふ功あれバ。念ふ忘うらば。而して過ハ。念ハざる忘うらば。人。我ふ恩ふまハ。忘るゝうらば。而して怨とゝ。忘まゝる忘うらば。同上

○我如し善を為さバ。一介の寒士と雖も。人の其德ふ感ずるあり。我もし惡を為せバ。位。人臣を極むと

雖も。人の其過を議する有り。紳瑜

○一日の中。或ハ一善言を聞き。一善行を見。一善事を行へバ。此日虛く度らぬとす。紳瑜

○晝の為ス所ハ。夜必ず之を思ひ。善あきバ樂ス。過あきバ懼る。君子ふる哉。省心錄

○世間第一。敬ずべきの人ハ。忠臣孝子ふり。世間第一。憐むべきの人ハ。寡婦孤兒ふり。清魏環溪語

○人の短を匿ハず。人の急をすくむざるハ。仁義の人ヨ非ざるふり。畜德錄

○君子能く人の危きを扶け。人の

急をそくふ。固より是美事かり。誇らざきバ益よし。顧體集

○人の善を聞て疑ひ。人の惡を聞て信じ。好て人ゟ短を說き。人ゟ長を計らぞ。其人平生惡ありて善かし。同上

○凡一念惡を思ひ。一事惡を行へむ。天道小背く。恐る可し。貝原初學訓

第六章

○我を非として當る者ハ。吾ゞ師かり。我を是として當る者ハ。吾ゞ友かり。我ゟ諂諛する者ハ。我ゞ賊かり。荀子

○小人固より遠ざくべし。然れど

も亦顯むよ仇敵とかを屋このらず。君子固より親む屋し。然きども亦曲て附和をべのらず。願體集

○不肖を以て人を待つ愚者と雖も甘ぜば。非禮を以て人を處を賤者と雖も亦怨む。習是編

○人の詐を覺るも之を說破きば。

其自ら愧るを待て可かり若夫孔愧を知らざる人ハ。又何ぞ責免人。金言

○人を感ぜ忘むる能ハぢるハ。皆誠の未至らざるかり。明薛文清語

○人の小過を責めば。人は陰私を發ゥぢ。人の舊惡を念むず。三の者

ゐ。惟以て德を養ふべきあらぜ。亦以て害を遠ぎくべし。遵生八牋

○古人の是非を品評せるハ可ゐり。今人の善惡を妄議せるハ不可ゐり。恨ぜ取ること。多くハ妄議ゐ在り。佐藤一齋語

○年高くして德ゐく。貪極りて恥ゐく。兇惡ゐして禮を顧ゑず。愚謬ゐして禮ぜ明よせず。此四等の人ゑ。與よ較せべからず。習是編

○人ぜ犯ゐさるることハ易く。人の我を犯せども。報いざることゑ難し。大和俗訓

○天下何事ゐ。怒りゐ因て錯らざ

らん。怒れバ忙し。忙しけきバ錯る。明陸桴亭語

○莫大の禍ハ。須臾の忍ひざるか起る。古語

○忍も亦辨あり。勢を畏きて忍ぶ者ハ。忍と為ふ足らず。畏るべきの勢なくして忍ぶ。是を真の忍と為す。紳瑜

第七章

○人か三の不祥あり。幼かして敢て長の事へば。賤の者敢て貴か事へば。不肖ぬして敢て賢の事へざる。是人の三不祥なり。荀子

○智ある者ハ。問を好て樂ム。智か

き者ハ。自ら用ゐて憂ふ。明楊慈湖語

○自ら重んぜざる者ハ。辱を取り。自ら畏まざる者ハ。禍を招く。自ら滿たざる者ハ。益

伊藤仁齋先生

を受け。自ら足まりとせざる者ハ。聞を博くせ。頌體集

○人の錯まる處を見くハ。時々我身を返り觀るべし。明程漢舒語

○一言の過も。莫大の禍とかり。一事の失も。終身の憂とかる。慎まざるべからず。大和俗訓

○人遠き慮なければ。必ず近き憂あり。孔子語

○名を成さんハ。毎に窮苦の日に在り。事を敗るハ。多く得意の時に因る。紳瑜

○難に臨まざれバ。忠臣の心を見ず。財に臨まざれば。義士の節を見ず。省心録

○丈夫一生。廉耻を重しとす。切に人に求ること勿れ。死生命あり。續小見語

○衣垢きて洗ハず。器缺て補ハず。人に對して。おほ慙る色あり。行垢きて洗ハず。德缺て補ハず。天に對

して。豈小愧る心無らんや。樵談

○寸も猶劍のごとし。善く之を用ゐれば。以て身を衛るべし。善く之を用ゐざれば。以て身を殺すよ足る。佐藤一齋語

○人を害せるの心も有るべからず。人を防ぐの心ハ無ざるべからず。

願體集

第八章

○人ハ貴賤を論ぜず。一日當よ作すべきの事あり。若飽食煖衣し。事を事とせざんバ。何ぞ好結果ありるを得ん。同上

○儉ハ萬善の本。奢ハ衆惡の基。唯

其身成敗の分るゝ所のことゝ非ぞ。其家儉おれば。福。子孫ゝ流き。奢るときハ。禍。後嗣ゝ傳ふ。慎まざる歟々ん哉。伊藤仁齋語

○家長禮を知きバ。男女勤儉衰門と雖も亦興る。一時の貧富ハ。論ぜるゝ足らず。紳瑜

○廉士ゝ財を愛せざるゝ非ぞ。之を取るゝと道ゝ由る。古語

○信を人ゝ取きバ。財の足らざることゝ。佐藤一齋語

和漢脩身訓巻三終

仙洲均書

明治十五年三月廿八日板權免許
同年五月四日出版
同年九月十八日再版御届

著者出板人　東京府士族　光風社長　亀谷行

發兌人
大坂北久太郎町　柳原喜兵衛
東京神田區金澤町十番地
同　備後町四丁目　梅原亀七
同　本町四丁目　岡島真七
同　南本町　中近堂支店
東京馬喰町　石川治兵衛

定價十錢五厘

明治十四年之冬以後製本以此紙為証

東京光風社

准稟